

寒い冬をどうやら持ちこたえた。四月になれば起きるよ、何あに今だって起きれば起きられるんだが、と三月私が出た時云つてゐたので私も大いに喜んで強をつけて来てやった。思へばそれが最後のお別れだった。四月になつても五月が来てもう／＼起きる事が出来ず、愈々医師から望を絶た、れたと云ふ事を聞いて見舞に行つた時はもう既に会ふ事も出来ない重患だった。それから一週間ばかりした五月二十日に遂に亡られたと云ふ知らせを受けた。

思へば十何年かの永いつき合ひであった。それが俳句の上のつき合ひばかりでなく、可成りお互の内輪にまで深入りしたつき合ひだった。どうかするとそうした交りの果ては必ず感情上の面白くないものに出逢つて、折角の所謂俳友まで棒に振つて終う事がある。処が長頸子君と私とは、どう云ふものか長い月日の間一へんもそうした感情の衝突など曾てなかつた事が不思議の様に思はれた。

話ははずつと前へ戻つて、大正三、四年頃水巴先生が丹後町の控家に住んでゐられた時からの事。曲水吟社の例会は毎月こゝでやつてゐた。三連隊の高台が真ッ青に茂つて、庭の青柿が／＼に葉かげに透けてゐる頃だった。殊に萩と芙蓉が縁を埋るばかりに生ひ茂つてゐた事を記憶してゐる。二間通して、その日の席上に当て、居る少し暗い奥の六畳の方で水巴先生と故左衛門先生が暗れやかに談笑してゐられた。たしか左衛門先生の前にはいつもの様に盃もあつたろう。縁に面した明るい方にはその頃の若手俳人で亜石、流遊子、地球子などいづれも新進の作家が、大いには背を見せて、三連隊を仰ぎ、青柿を見つめ又は縁にぶら下げた足で萩を弄つて居た。その中につ、ましく独りの様に句作してゐる若い人、即ち長頸子君なのであつた。糊の強い白地の緋を着て近頃流行り出した何とやら云ふ髪の刈り方も良く似合つてゐた。キビ／＼した馬鹿に感覺的な此

の人の俳句がその頃私達ちに非常に力強くたのもしく思はれた。で此の日はつきりと長頸子君を印象に止める事が出来た。

或る時一寸した話しの糸口から私と同郷である事が分つてから一層親しみを持つ様になつた。寒燈会が生れたのはそれから間もなくだった。一週一回各自の家へ席場を持ち廻つて盛んに作つた。實際良く作つたものだった。電車の無くなる時間は承知して居ながらもいつもさあ／＼切りだ、と云ふ者が無かつた。その内でも更けて益々冴えて来るのが長頸子君だった。

千一時頃そろ／＼浄書し出してゐると、静かに入つて来るのが長頸子君だった。そして煙草の煙の間からバサツ／＼と句箋を投げ込んで、浄書の終る頃は澄した顔で他の人と話しをして居た。それが又何とも云へぬたのもしさを私達に与へた。で又一番話題の豊富な持主であつたので、作句の了つた後の雑談が此の会合の最も面白くて親しみの深いものであつた。だから電車の心配などする人は一人も無かつた。渋谷の樹人君の処から歩いて戻るのは可成り思ひ病んだ、然し皆んなそろ／＼と月などの良い夜更けた青山の通りを帰つて来るのも悪くなかつた。

赤坂新坂町の長頸子君の下宿からは、麹町の私の家までは、一寸した遠い散歩程しか離れて居なかつたのでよく遊びに来た。大いいて遅くなつてからの方が多かつた。二階の床の中に眠りか、つて居る時、突然表の通りから「苔雨君……」と呼ぶ。これは長頸子君より外無かつた。今水巴先生の処からの帰りだ、と云つて原稿や、校正刷りなどうんと抱へ込んで私の二階へ上つて来た。

二人で四谷の夜店へよく出掛けた。寄席へもよく行つた。帰りにはずかカフェーか鮎の立食ひをやつた。細いキレイな指で器用に鮎をつまむのがいまだに目についてゐる。